

大平 滋先生のご退職に寄せて

岡 本 依 子

大平滋先生は、筆者が立正大学社会福祉学部に入職したときの学科主任だった。大学という職場は、他の大学と似ているようで、実はそれぞれの文化ややり方がある。研究室が与えられたり、授業を単独で担当することも多いせいか、実は赴任したばかりの教員は孤独で、わからないこと、わからないことがわかっていないことが、周囲に気づかれることなく放置されることも少なくない。そんななか、学科主任だった大平先生は「最初はわかんないからねえ」と親しみやすい口調で雑談を交えながら、同じ年に入職した石橋先生、吉岡先生、筆者の3名を連れて、教室内の設備等を説明してくださり、大変心強く感じたことを覚えている。また、私が入職した当時、よく入試の面接でペアとなり、同じ教室で面接者として配置されることがあった。大平先生は、入試面接で緊張する高校生に対して、柔らかな雰囲気を出しつつも、教育や保育に関しては的確な質問をされていて、面接者として隣に座っている私も素朴に勉強になると感じていた。そのころ、大平先生の授業を受講する学生が、「あの先生（＝大平先生）はすごい！なんでも知っているというか、専門的な感じがする。大平先生の授業が好きだ！」と話しているのを聞いて、納得した。また、仕事面で頼りになるだけでなく、学科での食事会のときなど、気さくに話しかけていただき、お料理に詳しいという意外な一面や、ご家族の話がされるときの温かな表情などに触れることもあった。

大平先生は、早稲田大学文学研究科博士課程で教育学の分野で研究され、その後、浜松短期大学（現・浜松学院大学）において幼児教育科で幼稚園教諭および保育士養成に携わってこられた。大平先生曰く、静岡で過ごした19年間は、自然環境豊かで充実した子育てができたとのことである。その後、2004年に本学社会福祉学部人間福祉学科（現・子ども教育福祉学科）に教授として着任された。大平先生ご自身は東京育ちとのことだが、早稲田大学大学院時代に、熊谷女子高等学校で非常勤講師をされたことがあり、熊谷という地に親近感をもっていらっしやっただろう。

大平先生に着任された当時のことを伺ってみた。当時の立正大学は全学部の1、2年生が熊谷キャンパスで学んでおり、かなり多くの学生でにぎわい、活気のあるキャンパスだったとのことである。大平先生は歴史あるテニスクラブの顧問をされ、学科外の学生とも関わられたそうである。テニスクラブについては、大学による2つキャンパスの学部再配置によって、多くの学部が1年次から品川キャンパスに移転したことから閉会となったそうである。また、1、2年生対象の基礎ゼミでは、学内の食堂ステラで懇親会を行ったり、3年生や4年生のゼミでは夏合宿を恒例にしていたとのことである。3年生のゼミでは、大学の軽井沢（2007年）・清里（2008

年)のセミナーハウス、4年生のゼミでは、2007年ごろから2014年ごろまで、新潟県の湯之谷村銀山高原の宿(2011年、2012年は震災後で中止)で合宿をされたとのことである。軽井沢では、リング狩り、ハイキング、テニス。清里では、清泉寮へのハイキングやテニス、研究発表、懇親会でのスタンツなどの出し物。新潟では、卒論の発表と川遊び、ハイキング、銀山湖のボート乗り、奥只見湖の遊覧船乗車、奥只見ダムの見学、スイカ割り、夜は恒例の花火大会と大きなログハウスで班ごとのスタンツなどの出し物など懇親会を実施したとのこと。学生との思い出は尽きないようである。このようなゼミ合宿の話に触れ、筆者はふと、「生涯学習」や「遊び」といった大平先生の研究テーマについても思い浮かべた。学生との交流を深めながら、学生はゆっくりした時間の流れのなかで、友人や導いてくれる教員と楽しさを共有しつつも議論を深めていたのだろうと推測し、多くのことを学んだに違いないと感じた。大平先生ご自身も、学生たちはたくましく育ってとおっしゃっており、その通りだと感じた。一方で、大平先生は、最近ではコロナウイルス感染症などの影響で深い交流が難しくなり、大事な時間が過ぎせないことを惜しんでいた。加えて、当時の教員同士の話として、ステラではお酒が飲めるカフェがあり、宿泊する教員と飲んだりもしたとのことである。今の熊谷キャンパスではお酒どころか油断すると食いつぶされるくらいの環境で、筆者は少し羨ましく感じた。

立正大学においては、学生への教育だけでなく、校務においても重責を担っていただいた。なかでも、2019年のカリキュラム改訂にむけて、教職課程では再課程認定の申請作業があった。これは多大な作業を要するものであり、教職課程において前職合わせて39年貢献されてきた大平先生は、再課程認定の総まとめ役を担っていただくこととなった。幼稚園、小学校、特別支援、中学校教諭、大学院の専修課程をまとめて、2017年から何度も講習会に出席して作業を続けていただいた。2018年には大平先生はサバティカル中にもかかわらず、文部科学省の説明会にもご出席いただいた。加えて、申請したその年に実査が実施され、これにもご対応いただいた。大変なご苦勞をいただいたことと思う。学科としても感謝したい。

立正大学での大平先生の担当授業は、カリキュラム改訂を経て、近年では、学部で「教育学の基礎」「教育課程総論」など、大学院で「生涯教育特論」などの科目を担当され、幼稚園実習2の取りまとめ役として、多くの学生の実習を支えてきた。

研究では、「生涯学習」や「まちづくり」、「野外活動とリクリエーション」などの分野で取り組んでこられた。生涯学習とは、学ぶという行為が子どもだけに閉じられたものではなく、成人などあらゆる世代に開かれたものであり、学びが学校教育を終えた後にも続く能動的な行為であることを示す。たとえば、子どもの生活研究プロジェクト「子どもの生活実態と生育環境づくり—熊谷市を中心に—」におけるアンケートの分析(大平、2017)において、子育て世代の現状認識を踏まえた「まちづくり」について検討している。今後のまちづくりへの要望として、「子どもたちがいきいきと育つまち、安心して子育てができるまち」などの回答が多いことから、次世代育成が可能となるようなまちづくりの重要性を強調する。また、生涯学習を人生100年時代の高齢者のあり方と重ね、生涯学習社会を築くための基盤としての生涯学習、生涯ス

スポーツ活動の活性化などに着目し (大平, 2020a), ヒューマン・キャピタルが変化の激しい長寿社会を生きていくうえで助けとなる (大平, 2020b) とも述べている。

これらの主張の背景には, どの世代であっても, つまり, 学校時代が終了した子育て世代や高齢の世代になってからも, 学び続けることがその人の人生を豊かにするわけで, そのためには, いかに生涯学習が可能な社会を構築するかということに集約していくように読み取れる。さらに, これは筆者の思い込みかもしれないが, その学びには遊びの要素が前提としてあるのではないだろうか。学びとはそもそも主体的な (主体的でないとは成立しない) ものであり, とくに学校を離れ, やらされることのなくなった大人の学びとは, それぞれの人のニーズにもとづく動機づけによって支えられているのではないだろうか。大平先生のご研究の根底にあるのは, その主体性であり, 遊びやリクリエーションの主体性と通じているように感じてならない。そして, 大平先生ご自身が, まさに遊び=学びとして, 人生を楽しまれているような, ちょっとおちゃめな側面をもっていらっしゃることを筆者はずっと感じていた。会議の前後や入試業務の合間, 学科での食事会など, 仕事モードではないときの日常的な会話で, 大平先生のご趣味やご家族の話などをよく聞いたが, そこから生活を大事にされていることがにじみ出ている。その印象と大平先生ご自身の研究とが結びついているのかもしれない。

生涯学習社会の構築は, 大平先生が述べられている通りまだ課題があるかもしれない。これは, 大平先生の研究が待たれていることを意味するのだと思う。また, 大平先生ご自身が書かれている通り「たえず人生のチャレンジを続けていなければならぬ」(大平, 2020b) ので, もしかすると新たなチャレンジをもくろんでいらっしゃるかもしれない。大平先生の今後のさらなるご発展を祈念する。後に残る私たちも, 大平先生から学んだ生涯続く学びの意義, その環境を整えることを引き継いでいきたい。

引用文献

- 大平滋 (2017) 生涯学習社会における子育て世代が求めるまちづくりの現状認識と課題: 熊谷市を中心に. 立正大学社会福祉研究所年報, 19. 163-173.
- 大平滋 (2020a) 生涯学習社会での環境整備と新たなライフスタイルのあり方. 立正大学社会福祉研究所年報, 22. 117-121.
- 大平滋 (2020b) 生涯学習における「成人力」とヒューマン・キャピタルについて. 人間の福祉: 立正大学社会福祉学部紀要, 34. 183-200.